

## 6 戦災復興以降に見られる歴史的風致

### 6-1 はじめに

第二次世界大戦において空襲の標的となり、多くの建造物を焼失した名古屋市では、その焼け野原からの立ち直りを目指して計画を立案、区画整理事業に取り組んだ。

同区画整理では多くの広幅員道路が整備され、その目玉である久屋大通、若宮大通という2本の幅員100mの道路には、それぞれ久屋大通公園（6-ア）、若宮大通公園が整備され、都心における貴重な緑地帯として市民の憩いの場となるとともに、屋外イベント空間として、名古屋まつり（6-あ）をはじめとした数々のイベント会場として、賑わいを見せている。

また、久屋大通公園（6-ア）には名古屋テレビ塔が位置し、同公園の景観を特徴づけるランドマークとして親しまれている

一方、敗戦からの立ち直ろうとする動きは市街地整備だけではなく市民による祭りも生み出し、中村公園（6-イ）では、当地で生まれたとされる豊臣秀吉を祀り、太閤まつり（6-い）が開催されるようになった。

また、現代的な市街地整備が進むと、名古屋市の目覚ましい復興と隆盛を祝した名古屋まつり（6-あ）が名古屋市の中心部で行われるようになり、江戸時代からの名古屋三大祭の伝統を受け継ぐ山車揃のほか、名古屋市ゆかりの戦国武将のパレードである郷土英傑行列がメインイベントとして現在まで行われている。

## 6-2 名古屋市の戦災復興に関わる歴史的建造物

名古屋への空襲は、昭和19年(1944)12月から昭和20年(1945)7月の間に38回を数えた。この空襲により、名古屋市は全市域約16,000haのうち約3,850haが焼失した。罹災戸数は、全焼113,604戸を含む計135,203戸、死者7,802人、負傷者9,911人という惨憺たる被災状況であった。官公署、学校、工場、銀行、百貨店なども多くが罹災し、名古屋のシンボルである名古屋城も天守や本丸御殿などを失った。



写真 2-6-1 終戦直後の市街地

敗戦直後の市民生活は、深刻な食糧不足に見舞われ、主食の配給量は戦争末期よりも低い水準にあった。また、野菜や鮮魚などの副食の配給はほとんどなく、路地や空閑地で甘藷・馬鈴薯などが栽培された。焼け跡には露店やバラックの闇市が続々と誕生し、「駅裏」とも呼ばれた国鉄名古屋駅西側一帯には、最盛期には600軒余のバラックが建ち、1日30万人の客が訪れた。その後も食糧不足は続いたが、昭和24年(1949)になると米の供出量が充分となり、市民生活は徐々に改善されていった。

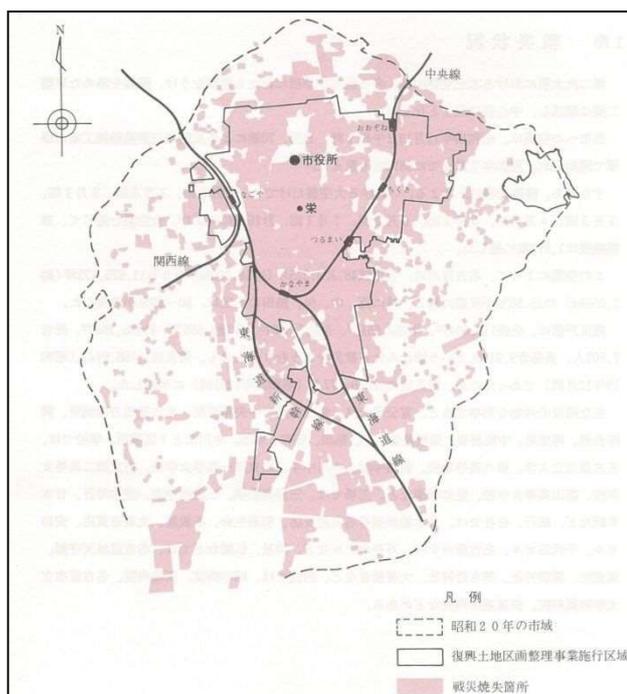


図 2-6-1 罹災の状況

## 戦災復興区画整理

戦後名古屋市では、瓦礫の処理、住宅の建設、上下水道、市電・市バス、電話、電力の復旧などの応急対策とともに、大規模な戦災復興計画を策定し、都市基盤の整備が進められていった。

昭和20年(1945)9月29日、戦後最初の臨時市会が招集され、この市会の冒頭において、「名古屋市再建に関する決議案」が満場一致をもって決議された。10月には、復興を担当する技監に田淵寿郎が就任した。田淵技監は、2本の100m道路の配置や墓地の郊外への集団移転など、当時としては想像を超えた大胆かつ雄大な計画を打ち出した。

12月には「大中京再建の構想」と題して100m道路をはじめとする幹線道路の配置計画を新聞紙上で発表した。当時の市内の人口は約60万人で戦前の約1/2に減少していたが、計画は、疎開中の市民に対しても印刷物の配布や新聞・ラジオで周知された。

翌昭和21年(1946)3月、名古屋市は、「名古屋市復興計画の基本」を発表した。計画の基本では、市域内では人口200万人まで機能的な都市活動が可能となるよう諸施設を設定することとし、用途地域等の土地利用計画の再検討、小公園と小学校の併設、公園の整備拡大、盛り場計画や墓地移転、幹線道路の拡張新設、鉄道立体化、運河整備、近隣住区の設定など復興の基本的な考え方を示した。同年6月には、復興土地区画整理事業施行区域と幹線街路が都市計画決定され、名古屋市の復興事業が本格的に動き始めた。

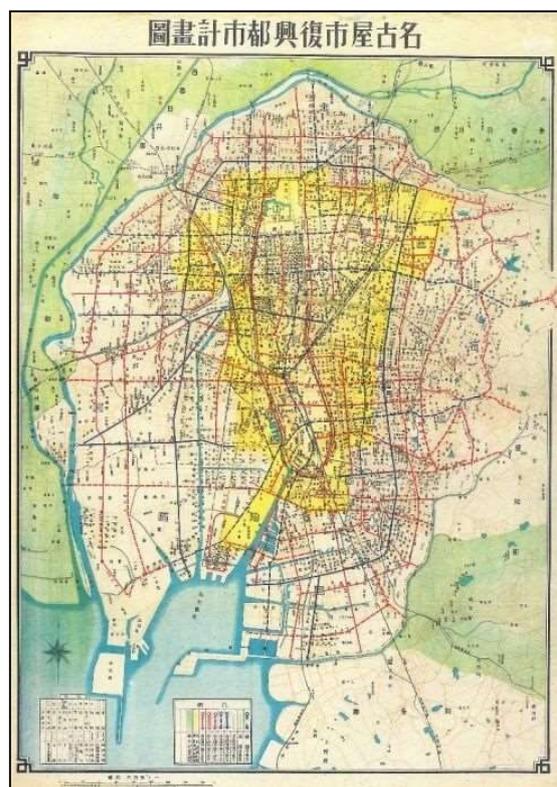


図 2-6-2 名古屋市復興都市計画図  
(昭和23年発行)

戦災復興事業の中心である土地区画整理事業は、昭和 21 年（1946）6 月、戦災焼失区域を中心に 4,406ha を計画決定し、翌年平和公園 115ha を追加して開始された。

大規模な土地区画整理計画を実現するにあたり、重視された事業のひとつが、郊外への墓地移転であった。昭和 21 年（1946）6 月 17 日、関係する仏教各派から 16 人の代表者による名古屋市戦災復興墓地整理委員会が結成され、昭和 22 年（1947）5 月 6 日には東山に隣接する丘陵地帯に墓地と公園とが一体化した墓苑（第 1 号東墓苑）を整備する都市計画決定がなされた。こうして誕生したのが平和公園である。

墓地移転にあたり、墓地整理委員会は墓苑の計画、各宗派の意見調整などに尽力した。各委員はそれぞれの宗派ごとに寺院を担当して説得にあたった。これら委員の説得により同意を得た例も多く、墓地整理委員会は墓地の円滑な移転に大きな功績を残した。墓地移転は昭和 32 年（1957）11 月には概ね完了した。

現在、公園内には、平和堂、無縁塚、伊勢湾台風殉難者慰霊碑など慰霊や平和を祈願する施設のほかに、桜の園、メタセコイア広場、やすらぎの園などが整備されており、市民の憩いの場として利用できる環境となっている。



写真 2-6-2 平和公園

名古屋市の戦災復興土地区画整理事業は、墓地移転が有効な手段として機能したことなどにより円滑に進められた。

復興土地区画整理事業により、宅地・道路・公園など住居地の近隣環境は全国有数の水準に高められ、その後の市の住宅水準を高い状態に維持する規範となった。また、広幅員道路の整備は、中京工業地帯の動脈として工業都市化に大きく寄与するとともに、後の交通政策に多くの影響を与えた。具体的には、市電の廃止とバス・高速鉄道を主体とした公共交通体系への移行、基幹バスの創設など公共交通の充実への足がかりとなった。都心においては、城下町の町割りに由来する碁盤割の道路体系がさらに進められ、道路の拡幅と都心機能を受け入れる土地の区画と敷地割りが行われた。

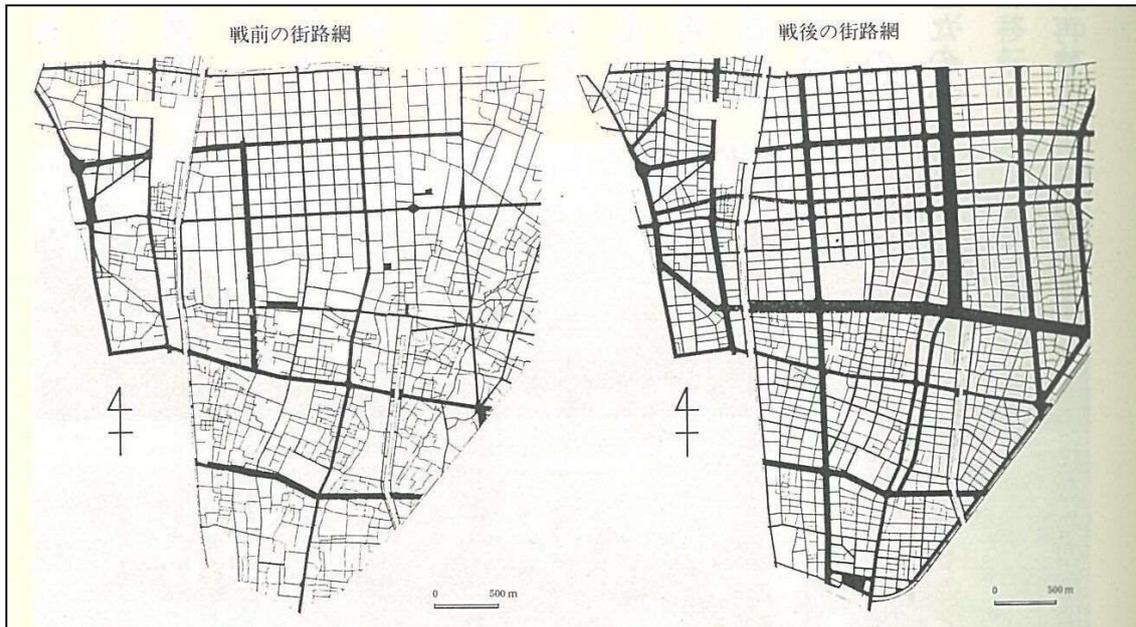


図 2-6-3 復興区画整理による街路構成の変化  
 (『新修名古屋市史 第七巻』(平成 9 年(1997))より)

## 6-ア 久屋大通公園

こうして進められた戦災復興土地区画整理事業のシンボルのひとつが 2 本の 100m 道路である。現在、2 本の 100m 道路は、都心の交通軸、都心のオアシスとして、名古屋の交通、都市景観に貢献している。また、両者は久屋大通公園(⇒6-あ 名古屋まつり)、若宮大通公園として整備され、各種イベントや市民活動の場としても活用されている。

この 100m 道路がどのような意図で計画されたかについては、いろいろと議論されるところである。昭和 21 年(1946)、市長は市会の予算説明の際、「今回の街路で特異性を有するのは緑道の設置であつて幅員百米、東西に一本、南北に一本設けたが、これは保健衛生、災害防止の立場からいたしたが、一面都市美観の上からも相当の役割をなすものと考えて居る」と述べている。また、当時の田淵技監は後の自叙伝の中で、「普通の道路という観念とはちょっと違うが、百メートルの防災道路もいまではひとつの名物にさえなりそうである。東西、南北二本の百メートル道路により名古屋市を大きく四分割する。…という考え方の根底にあるものは、火災など災害を防止したり、避難所にするのであった。…この道路には、中央にグリーンベルトを設け、都市の美観にも生彩をそえフランスでいえばシャンゼリゼに相当する遊歩地帯にしようと、着々工事が

進められている」と述べている。このように 100m 道路は、災害時には火災などの延焼防止と避難所としての機能を持ち、平時には市民の保健衛生のための遊歩地帯であり、グリーンベルトとして都市の美観を向上させる目的と機能を持った道路なのである。

近年は、久屋大通公園の再整備が進められ、新たな都市空間の創出がなされている。



写真 2-6-3 再整備された久屋大通公園(Hisaya-odori Park)の様子(テレビ塔エリア)

### 名古屋テレビ塔（重要文化財）

久屋大通公園内には、昭和 29 年（1954）、日本初の集約電波塔である名古屋テレビ塔（⇒ 6-あ 名古屋まつり）が誕生した。総高 180m は昭和 29 年（1954）の竣工当時、日本一を誇った。

昭和 27 年（1952）、NHK 名古屋放送局がテレビの定期実験放送を開始した。当時、東京や大阪では、放送局ごとにテレビの送信用の鉄塔が建設され始めていたが、名古屋では、近い将来登場するであろう民間放送にも対応するため、NHK と共同で利用する電波塔が計画された。建設場所は、江戸時代に城下町の東西幹線であった伝馬町筋と、戦災復興で実現した 100m 道路（久屋大通）のほぼ交差するところである。この場所には、昭和 22 年（1947）に発表された高速度鉄道第三次計画に基づき、高速度鉄道南北線（現 地下鉄名城線）が計画されていたため、4 本の塔脚を開いた形になったとされている。

名古屋テレビ塔の設計は、後に大阪通天閣（1955 年、約 100m）、さっぽろテレビ塔（1957 年、約 147m）、東京タワー（1958 年、約 333m）などを設計した内藤多<sup>たちゅう</sup>仲が担当した。テレビ塔は、142m の高さの鉄骨トラスに 38m の高さ

のアンテナを載せたもので、重心を低くするため、鉄筋コンクリート造の構造物（交差アーチ）を塔脚部に取り付けている。地上 90m のところに展望台、その上に展望バルコン（昭和 43 年（1968）増築）を設け、腰部には休憩サロンや売店などを収容する 3 層の建物をとりつけている。

展望台の取り付けられたテレビ塔は、開業当初から観光タワーとして多くの人々を集めた。開業当時のテレビ塔からは、濃尾平野の眺望に加え、戦争の焼け跡から復興する名古屋の姿を見ることができたという。開業から 10 カ月目の昭和 30 年（1955）4 月 5 日には、入場者が 100 万人を突破した。令和 4 年（2022）には、全国のタワーとしては初となる重要文化財に指定され、今も名古屋のランドマークとして親しまれている。



写真 2-6-4 名古屋テレビ塔  
（写真提供：（公財）名古屋観光コンベンションビューロー）



写真 2-6-5 開業当日の名古屋テレビ塔

## 6-1 中村公園

中村公園（⇒6-1 太閤まつり）は、明治 16 年（1883）に豊臣秀吉旧跡を訪れた愛知県令の国貞廉平が、「一祠を創建して豊公の遺跡を顕彰しその霊を慰めること」を約束したことに始まる。これを受けて、地元の戸長らは県令に対して『豊国神社創建願』を提出するとともに、各方面への資金調達の依頼や浄財の募集などに奔走し、その結果、明治 18 年（1885）に神社の一部となる神殿が竣工した。



写真 2-6-6 豊国神社

明治 34 年（1901）には、豊国神社境内地を含む旧跡地が愛知県に寄付される

とともに、県議会において公園の設置が決定され、明治 35 年（1902）に「中村公園」が誕生した。

明治 43 年（1910）の加藤清正 300 年忌を機に、清正を豊国神社に合祀するとともに、この頃から大正期にかけて愛知県による公園整備が進められた。それにより、公園地の拡張・整地や園路・植栽の整備が行われたほか、木造瓦葺の記念館や料理店・茶店などが建てられた。明治 43 年（1910）11 月 18 日に皇太子（後の大正天皇）が中村公園に立ち寄られ、豊国神社参拝後、松を植樹された。このとき、同年竣工した記念館が迎賓館として使用された。

大正 10 年（1921）、名古屋市は市域を拡張し、中村町は西区に編入された。これにともない、中村公園は愛知県から名古屋市に無償で譲渡されることになり、大正 12 年（1923）4 月 1 日付で移管された。また、この時期にはかつての中村町民によって、名古屋市との合併を記念する記念物の建設が計画され、昭和 4 年（1929）に豊国神社奉献大鳥居が建設された。



写真 2-6-7 大鳥居

昭和 10 年（1935）、名古屋市会では中村公園拡張に関する提案（拡張敷地 15,322 坪）が可決された。拡張費用の一部は、東宿・中村・日比津の三土地区画整理組合と名古屋土地株式会社からの寄付が充てられ、工事は昭和 11 年（1936）から始まった。工事では、豊国神社の拡張、運動場の整備などが行われ、昭和 14 年（1939）に竣工した。

戦後、中村公園は、公園内に建設された競輪場と豊国神社を公園区域から外す一方で、茶席や児童用遊具などの施設を充実させていった。平成 3 年度には、中村文化小劇場、中村図書館、秀吉清正記念館からなる「中村公園文化プラザ」が開館し、多くの市民に利用されている。

中村公園とその周辺には、豊臣秀吉や加藤清正などにゆかりの史跡や寺社が立地している。

太閤山常泉寺は、寺に伝わる太閤山縁起によると「豊国大明神の廟堂にして慶長年間加藤清正公が一族の円住院日誦上人と謀って創建され、此地は筑阿弥の宅趾にして、豊太閤天文五年正月元旦降誕の地なり」と伝え、境内には秀吉誕生のときに使われたと伝わる豊公産湯の井と秀吉御手植えと伝わる 柗<sup>ひいらぎ</sup>がある。

妙行寺<sup>みょうぎょうじ</sup>は、名古屋城築城の折、加藤清正が自分の生誕の地に余材を寄進して再建したとも伝わる。寺には、県指定有形文化財の「絹本著色加藤清正画像」が保存されている。また、境内には、文化 7 年（1810）に中村公園内の高畑八幡社に建てられたとされる「加藤肥後侯旧里の碑」や昭和 35 年（1960）に設置

された清正の銅像がある。

昭和 42 年（1967）には、豊臣秀吉と加藤清正を顕彰する豊清二公顕彰館が建設され、現在の名古屋市秀吉清正記念館に引き継がれている

### 記念館（登録有形文化財）

記念館は迎賓館として建てられたもので、L字型平面の木造平屋建。正面中央に唐破風造の車寄を張り出し、四周に下屋を廻らす。西側は和室三室を並べ、吟味された良材を用い、座敷飾りを備え、天井高の高い空間と共に、迎賓館としての風格を今に伝える。



写真 2-6-8 記念館

### 豊頌軒（登録有形文化財）

ほうしょうけん豊頌軒はもと松林庵と言われ、明治初期に建築され、昭和 32 年に祖父江町から中村公園内に移築された。四畳半台目席と二畳席を持つ茶室で、昭和 63 年（1988）にできた桐蔭茶室とともに市民に使用され親しまれている。

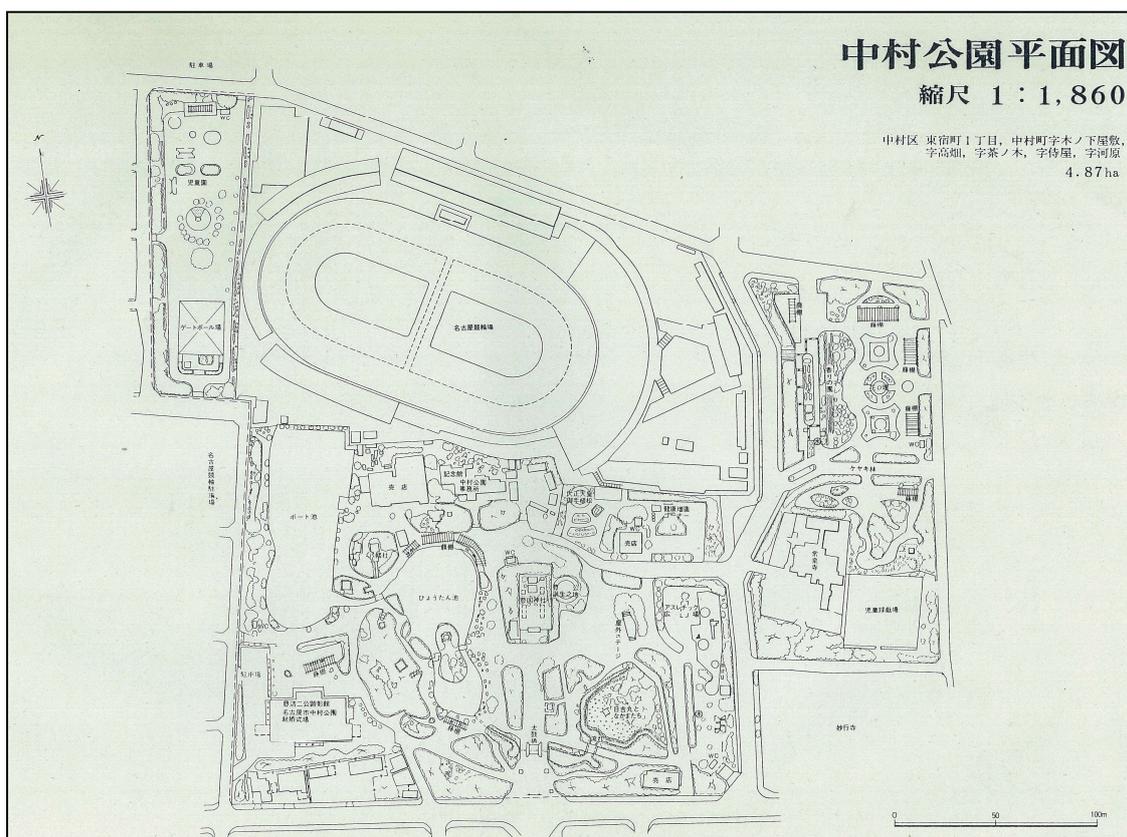


図 2-6-4 中村公園平面図(昭和 58 年(1983))

### 6-3 名古屋市の戦災復興に関わる伝統的営み

#### 6-あ 名古屋まつり

名古屋は甚大な戦災を被りながら、終戦後 10 年にして産業文化都市として戦前を凌駕する飛躍的な発展を遂げた。昭和 30 年 (1955)、名古屋の目覚ましい復興と隆昌を祝した一大レクリエーション行事として、第 1 回の名古屋祭(現名古屋まつり)が開催された(『名古屋祭事業報告書』(昭和 30 年 (1955) より)。戦後に始まった名古屋まつりも令和 5 年には 69 回を数え、今や名古屋の伝統行事のひとつである。第 1 回の名古屋祭では、10 月 10 日~20 日の期間中、戦災復興事業により整備された道路上でさまざまな催しが行われた。また、前年に完成したテレビ塔は、各種パレードの終点となるなど、名古屋祭の拠点のひとつとなった。また、テレビ塔周辺の広場では、自動車展示会や山車・御輿コンクールなどが行われた。この名古屋祭で行われた主な催しは、郷土英傑行列、山車揃、花電車の運転、市民仮装行列、市職員仮装行列、第二回全国優良機械展、伸びゆくプラスチック展、第三回名古屋陶磁器展、中部日本貿易振興展、第九回発明展、歴代市長芳墨展、郷土古地誌展などであった。これらのうち、

山車揃や郷土英傑行列は、今日までまつりのメインイベントのひとつとして行われている。



写真 2-6-9 花電車

現在の名古屋まつりでの山車揃は、江戸時代、名古屋城下やその周辺で行われた山車祭りの伝統を引き継ぐものである。第 1 回の名古屋祭に曳き出された山車は、唐子車（中村区内屋敷町）、紅葉狩車（中村区花車町）、<sup>にふくじんしや</sup>二福神車（中村区花車町）、<sup>もみじがりしや</sup>湯取車（東区筒井町）、<sup>ゆとりぐるま</sup>神皇車（東区筒井町）、<sup>じんこうしや</sup>福祿寿車（中区末広町）、<sup>ふくろくじゆしや</sup>鹿子車（鹿子神車の別称）（東区新出来町）、河水車（東区新出来町）の 8 両であった。当時、山車は名古屋市役所前でからくり人形を披露したのち、本町通、広小路通などを通してテレビ塔まで曳かれた。絢爛豪華を誇る山車の行進は沿道の市民の注目を浴び、通過の際には、いたるところで黒山の人だかりを築いたという。現在の名古屋まつりには、第 1 回の名古屋祭に出された 8 両に加えて、戦災で焼失したのち復元された<sup>おうぎししや</sup>王義之車（東区古出来）が曳き出されている。山車揃では、当時と同じように市役所（重要文化財）前でからくり人形が披露されたのち、現在は大津通を南進し、栄交差点まで曳かれる。



写真 2-6-10

第 1 回 名古屋祭の山車揃

信長・秀吉・家康の郷土英傑行列は、第 1 回の名古屋祭から行われている。当時から 2 日間にわたって行われており、初日は名古屋城を起点に、市役所、本町通、広小路通、南大津通を通過して大須歌舞伎座前小公園までであった。行列には 475 人が参加し、その長さは 800m に達した。市役所前では、「傘使い」「棒の手」「清正石曳きの手踊」の実演が行われた。信長・秀吉・家康の三英傑は、昭和 48 年（1973）から公募が行われている。現在、郷土英傑行列は鎧武者や足軽隊などが迫力のある合戦劇を交えながら市中心部を練り歩く。なお、信長隊、秀吉隊、家康隊の各隊は、名古屋の百貨店の提供で行われており、この伝統も第 1 回から続くものである。

現在、名古屋まつりは10月中旬の2日間の日程で開催され、名古屋まつりの呼び物である行列も2日間にわたって行われる。初日は、郷土英傑行列、フラワーカーパレードなどが名古屋駅前を出発し、広小路通、栄交差点、大津通を経て若宮大通の矢場町交差点まで行進する。2日目は市役所前から若宮大通までの大津通を南下するルートである。2日目は9両の山車を先頭に、神楽揃、子ども会みこしパレード、フラワーカーパレードなどが続き、最後に郷土英傑行列が登場する。名古屋まつりの行列は、戦後、城下町の碁盤割を活かして新たに整備された広幅員道路上で繰り広げられてきた一大絵巻であり、沿道には行列を見ようと多くの人が詰めかける。



写真 2-6-11 郷土英傑行列

名古屋まつりでは、行列のほかにも久屋大通公園（⇒6ーア 久屋大通公園）などの各会場でさまざまな催しが行われる。久屋大通公園には特設ステージが設けられ、各種発表が行われる。

また、名古屋城も会場の一部としてイベントが行われるほか、有料区域の無料開放が行われ、江戸時代に庶民が城内へ入る数少ない機会であった名古屋三大まつりさながらの賑わいを見せる。

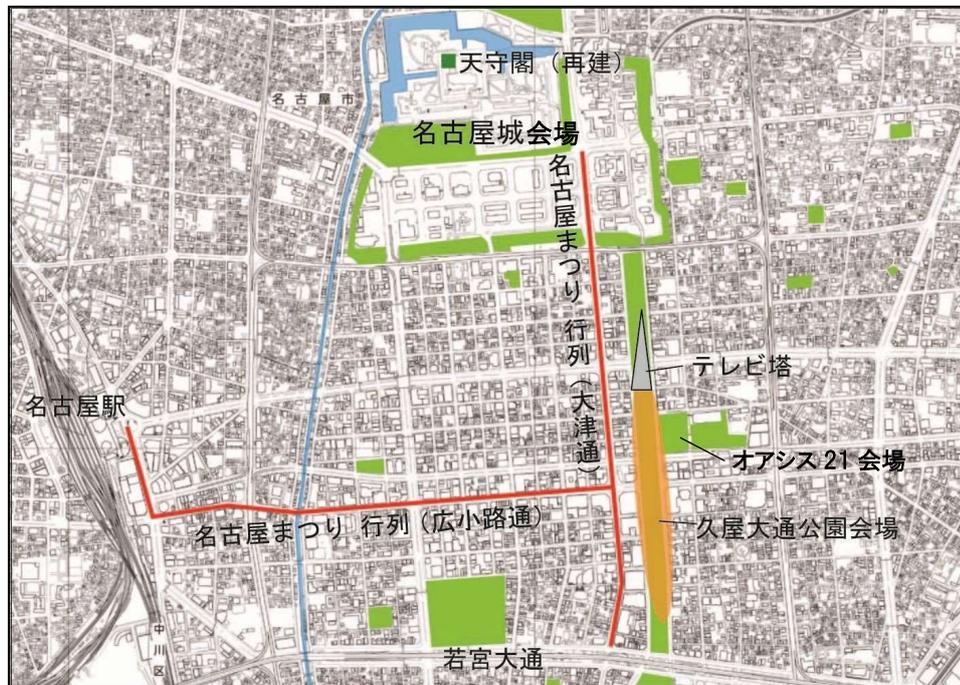


図 2-6-5 名古屋まつり関係位置図

## 6-い 太閤まつり

中村公園（⇒6-い 中村公園）では昭和23年（1948）に始まった太閤まつりが現在も行われている。これは、敗戦の虚脱から立ち上がろうと、秀吉の命日である18日とその前日を選び、気候のいい5月を開催月として始まったものである。まつり当日は、大鳥居から公園正面に至る約500mの参道に露店が並び、太閤出世太鼓、豊太閤頭巾・出世稚児行列などの秀吉にちなんだ催しや茶席「桐蔭」での呈茶などが行われて多くの人で賑わう。

豊臣秀吉を祀る豊国神社創設に始まる中村公園は名古屋の公園の中でも特に長い歴史を持つ公園である。中村は天下人秀吉や加藤清正の出身地として広く知られており、地元の人々は、中村が全国へ羽ばたいて活躍した武将たちの故郷であることに今でも誇りを持っている。中村公園はその伝承の中心地として、今日も人足の絶えることはない。また、戦後に始まった太閤まつりは、秀吉の出世にちなんだ行列などが行われ、秀吉の出身地ならではのまつりとして親しまれている。



図 2-6-6 太閤まつりの行列経路図



写真 2-6-12 豊太閤頭巾行列

#### 6-4 まとめ

以上で見たように、名古屋城、名古屋市役所本庁舎、名古屋テレビ塔といった歴史的建造物や、戦災復興区画整理による広幅員道路、特に久屋大通公園を会場として、名古屋市の目覚ましい復興と隆盛を祝した名古屋まつりが行われることにより、戦災からの復興と今日の名古屋市の隆盛を結びつける歴史を感じることができる良好な市街地環境を形成している。

また、名古屋まつりで行われる郷土英傑行列と同様に、武将顕彰の祭りとして中村公園で行われる太閤まつりがあり、敗戦から立ち上がる際の心の支えになっていたことを現在に伝えている。

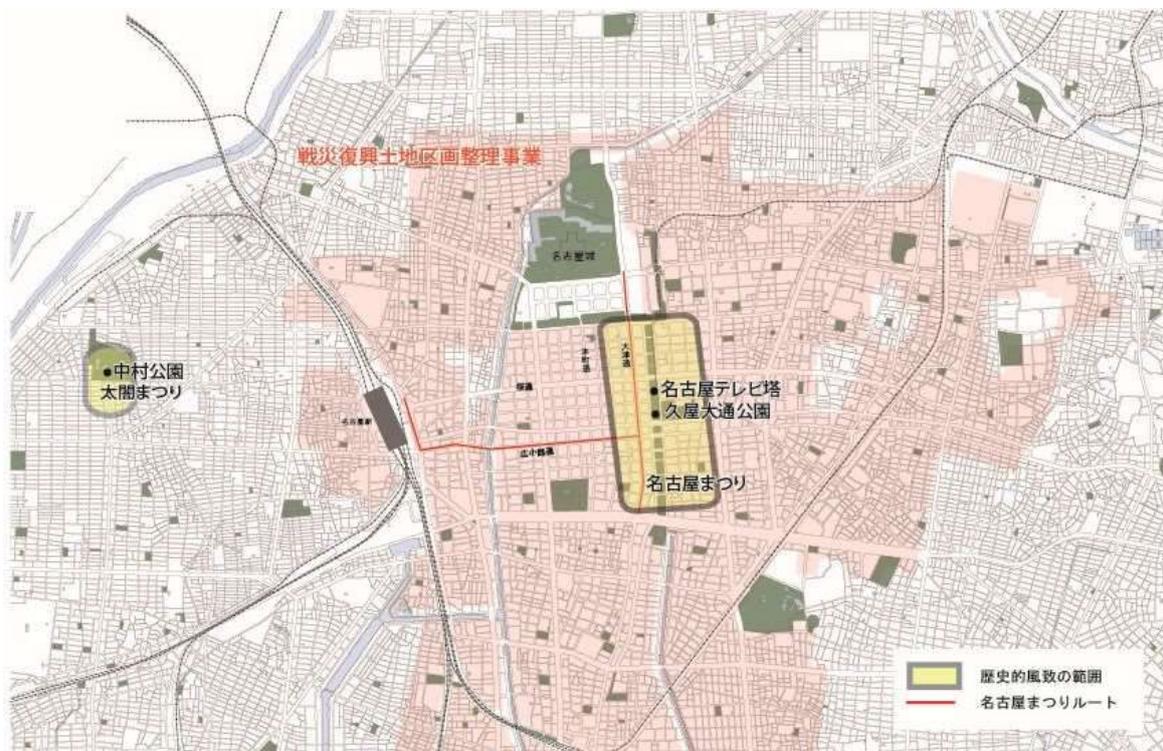


図 2-6-7 戦災復興以降に見られる歴史的風致の範囲